

柳菴雜筆

柳菴雜筆

		二	和
		二	書
		一	門
		〇	
四	七	五	類
冊	架	函	號

69

庫	文	閣	內
二	二	二	和
三	七	七	書
函	九	九	
二	〇	五	類
三	四	號	
架	冊		

內閣文庫	
番號	和 26795
冊數	4 (1)
函號	263 69

漫筆雜考

隨筆十二四

新

263-69



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



柳菴雜筆卷之一目錄

世鏡鈔百貫領主馬一疋持と

淺草關乃祿庫

衛士乃祿

平家物語乃作者

梅畑乃糞袋

挿翹と猩々乃誤

假面工

五畝乃宅

五畝乃宅

野々村彦左衛門乃事

松平民部少輔箭竹を堤了植一事

七首

朝鮮戸籍

彦根乃儉徳

妓王 妓女乃父乃名

頼朝卿尊氏將軍妻婦相姓同一事

文鏡乃始

宿帳 精

秀吉公関白成御祝の獻立

又腰刀

宿賃

逸史の訛

大佛入用

三井家系

鶴見原

柳菴雜筆卷之一目録終

柳菴雜筆卷一

栗原信克 著

○世鏡鈔。百貫領主馬一疋。のり。地頭ハ馬一疋。のり。年中。小食物之十四貫あり。是れ心得へ。相残る。六貫。不慮。廿貫。中間三人。廿貫。家物。廿貫。我物。残六貫。遊の料。大唐。小。千貫領主馬一疋。年中。小。之。百。之。十。貫。食物とあり。以。書。序。ハ。西園寺。右大臣。公。家。小。之。跋。慈照院。贈。大相國。義政。家。の。撰。あ。ま。延徳。二。年。前。小。か。書。お。教。ま。の。論。か。慈照院。殿。ハ。延徳。二。年。月。七。日。薨。御。也。之。此。頃。乃。應仁。以後。錢。み。く。中間。一人。乃。給。公。六。貫。六。百。六。十六。文。小。當。る。之。知。へ。又。百。貫。乃。家。小。馬。之。中間。三人。と。云。哉。

柳菴雜筆卷之一

狐草子所載中間

ちんぐんとおれくさ
 めくきとさたふ男ニ人
 くしたろ



又海人藻芥ふ門跡
 人数と下の事出世者 大長の息
 禅侶若 法大まのふより
 北面等の侍ろふ
 坊官大長の息あう 敬上人のふ 在家法肝也
 侍法肝 三綱をつとむ
 中童子 中間法肝 承仕をつとむ
 まれふ 依ハ法肝ふ 中間あり

依藤太繪詞所載中間

太平記の山本九郎
 時綱たぐ一騎中間二人
 長刀を合せてさ
 とあるを合せてさ



信光圖

を世鏡鈔乃割合入去々々昔乃一貫文今乃金四拾八
 小部。此は昔乃世に貫の今乃金廿七兩と拾八あり。是
 を食物と云。一日一人白米四合。塩麩十六文と積りて
 一年分白米五石四斗。代金八拾。塩麩六貫文。金と換れ
 分八匁合さく金外兩と小拾を子七分八匁余あり。廿七兩拾
 余あり。即ち拾壹人分と。殘金七拾分。即ち次子小慮
 廿貫を今乃拾六兩なり。衣服其外了用拾へ。中間廿貫
 也。亦十六兩なり。僮僕乃手前。客物廿貫ハ。臨時入用あり。
 殘六貫ハ。即ち兩三分之五あり。遊宴乃料不充へ。是れ世
 鏡鈔乃割合あり。出入差分々々々乃意ぬ。もあふへれ
 と。僮僕客物乃料を節へ。馬一疋乃飼料十兩計ハ

出さるる。是れ現米八十石を騎士乃禄と定められ
 去ある。是れ也。

○上古衛士乃禄大寶令了見々々。是れ集録也。及本國
 乃に分回二段乃獲稻百束。絶二足。百廿束。綿一屯。直
 稻十系一約。直稻布。直稻。百束。直稻。直稻。直
 東。直稻。合稻。百束。十束。米。今量乃十一石。〇〇
 六合。九撮。又抄ふ當れ。是れ外了日別一升二合。一升
 一合。六白之撮。六石。當。を給。是れ形。十一石。〇〇。六
 石。二人。粟。食。少強。あり。合。九撮。又抄乃米。今乃物。成。廿七俵。余。不。當。今
 同心乃禄。十石。又斗。二人。粟。食。乃淵源。と云へ。

○平家物語乃作者。醍醐寺雜抄。不。或。平家雙紙。奥書。云

當時命世乃盲法師了義坊實名乃說平家物語中
 中納言顯時子息尤衛門佐成隆其子民部推少輔時
 長也也を作家又將門保元平治以上部同人作云々
 此時長前平家廿四卷之本を作伊勢太神宮本籠
 訖也也佐渡院乃御時也順德院後嵯峨院御在位時
 告大貳資經作乃平家物語民部少輔時長書之合戰乃
 事才覺あさふ依源光行小訛之十二卷平家資信卿
 書之と見ゆ今考ふ了義坊如一月日件録文安五年八
 月十五日乃
 條あり性佛乃後如一檢校と云者あり覺一城一乃師
 ありと云者あり今盲人一方乃開山と為其時代定
 かからゆと云共其弟子覺一應安元年六月廿九日没

故と常樂記に載た述のまよ里前乃人あると勿論
 去及兼好法師と由時を同くせ里然る兼好也
 物語信濃前司行長乃作ふ慈鎮和尚乃時と云里
 慈鎮和尚嘉祿元年九月廿六日七十一歳ふ入滅
 と座立記に見ゆ兼好乃説乃如くは此物語嘉祿乃前
 不成いあり一兼好三年より吉田大貳資經卿嘉祿
 元年四十二歳あり源光行清和源氏鎮守府將軍満
 政満仲八代乃孫河内守光行あり東鑑小兼好三年八
 月二日乃条
 大監物光行清久大郎行盛相具く下向せしかば
 金洗澤ふ於て誅戮せら敷るあり光行嫡男民
 部大輔親行泣々愁申ふ依て其罪を宥らる往年光行

乃父豊前守光秀平家了與一右幕下乃誅小處せらば
けは時先行一向愁訴去死を援た望し芳因あるへ
と記せ里先行承久乃亂を自親周旋し心中小蘊蓄
せる感慨を父に經歷せし平家乃故事小就る發露せ
るあらん時長乃父盛隆一平乃姊平大納言時忠卿
乃室家小く安徳天皇乃御乳母典侍乃局と云是あ里
又盛隆乃継母を刑部卿忠盛乃女あせり平相國入道
海を盛隆母方乃叔父小當分死せば是等乃人々平家
繁昌の事實へ耳小中眼るも熟せしあふへ抑承久
乃亂を天地乃大變あ里六月十日宇治合戦敗せり
官軍潰走し之上皇蒙塵乃後日月を誰為小宇宙を照

臨し君臣乃義父子乃道誰を適としく協従せへ義
時乃官々右京權大夫兼陸奥守位を從位下小く
順徳院乃宣旨あらけやに品乃官職小居く上を鸞輿
を僻遠了後し自伊尹乃賢小擬し下を公卿を濫殺
去く却る鼻陶乃徳小比せ然し以し自慙小と形し是
諸家乃平家物語を作ふ所以あ里心を静小ふ能平
家を讀く入道相國乃驕奢暴虐あふ巖島一紙乃起請
文を要し鎌甲兵具卒乘乃猛威小澄憲法印一時乃説
法小折伏せらぬ其衷心の如くも王法を敬重し君臣
乃大義を忘せし今乃義時乃王法を棄捐去く武威を
逞くあし君臣乃禮を蔑如し私恩を慕ると日を同

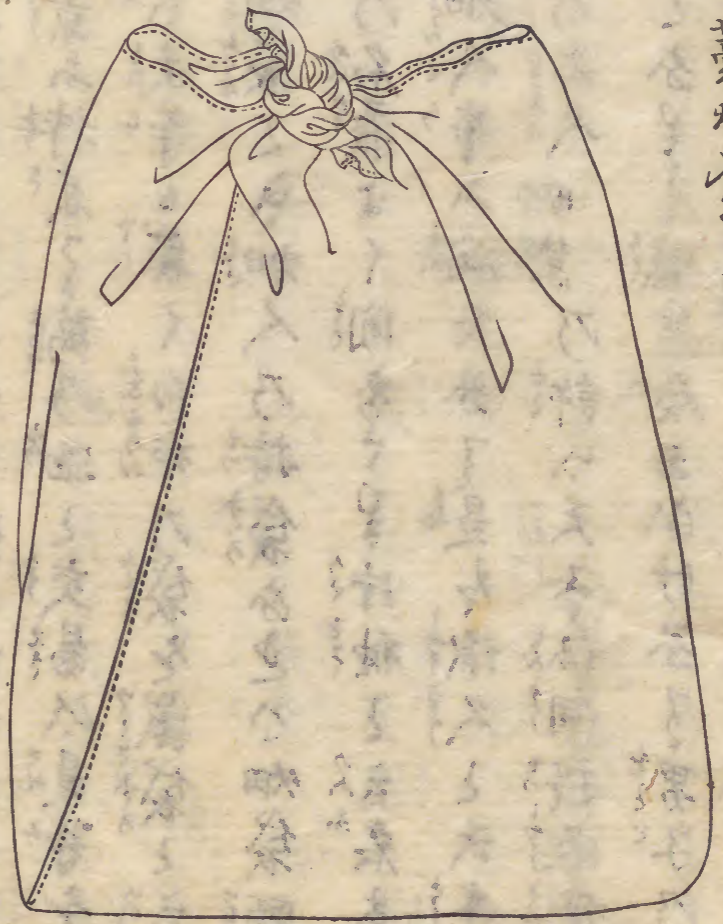
く志く語る毎々んや平家乃一門即従一勝一敗あり
と云共其箭盡弓折力極るに至るの主よ國母よと
卿相雲客卒候るに至る皆盡く自裁志く軍門了手を東
く降虜しかる者あし今乃官軍一人乃力戦志く死を快
せし者かく頭を延く櫬を輿ひ一日片時乃生を貪て
耻を千載不遺し身大長了處く死を以て果了事る上
能え以却る賊虜は降り果不叛し後榮乃為志義
を忘せし輩と豈時を共みく云へんや鎌倉乃右
幕下乃意平家を討く父乃仇を復せ教了生と云共猶
敷宜を奉し私怨を露せ今乃無名乃軍と伺り
以是等乃微意あふしを覺る者あし徒不驚者乃驚と

あしゆる上と大そに惜々れ

○山城國葛野郡梅畑平岡善妙寺邊乃婦女子日毎薪
を頭り戴り京へ持來く萬乃物と交易以是等を京へ
くわ畑人と云夫等り戴く白布乃袋を戴袋と云或は
片袖あふり畑袋と云畑人乃持袋あせハ畑袋頭不戴
く故戴袋そ乃名義よく聞えく片袖と云名出せ心
得らせぬと畑人等も向失ふ是を承久と云年の上
あふり梅尾乃上人明慧乃許へ天子仙洞攝政園白を
始餘多落人とあしく隱せ居むひけふり男子乃分々
上人乃許ふ冬集し王宮を守護し女子を是れ任く
諸國へ往來し萬乃物を取來り供御より下をべく

片袖袋 戴袋 細袋

此袋乃中へ藁を入り 頭ふりきき 其上は薪をのせし 京へ



此袋の 頭痛 乃ちまひ 了ぬい 志多ありと云

朝暮乃儲み免一時御衣乃片袖を解じけ 旗袋乃形み
 縫ふ是を戴きしむ王宮勤仕乃笠印小賜し里川家也
 去は六百年乃末の世に至りし由此袋戴き約ハ關渡ハ
 坂何處み由あせ心乃儘り往來し侍るありと語れり
 其袋を請得く其法量を詳み考ふる布幅一幅ふく
 長を鯨尺二尺三寸形り二小折り一尺一寸又分の大尺
 乃一尺四寸餘り當り縫止く一尺三寸餘とあるへ
 即今乃兵士衛士等り袍襖乃袖一尺三寸と云る協へ
 此片袖と云説也據あるふ似たり又後鳥羽院乃御袍
 乃袖長大尺ふく二尺あり是を三分し二分の一尺四
 寸六分餘ふ當る此片袖と全く同し然らば後鳥羽院

和名片袖袋

乃御小袖乃法量ふ合ふ中不思議乃とあらきや

○天保六年乃秋狸壽狸美と云童男二人出来るその母と
 世豊前國宇佐郡小濱村乃民乃子あふり同一村乃狸魚師
 善兵衛り妻とありぬ去共家貧く生産乃次負之けし
 かり任せし嫁せんため身々と別れ去る他國へ出ゆ
 妻を兄乃家了歸り日々ふり入る業を熊里了鬻て價
 を求め實を敷ありけり時とて氣を失ひ暫ハ
 人心地ふり事度重りて遂に懐妊あり狸壽を産り
 文政八年 髪乃毛赤く狸々了似り又年立く同一様
 の事あり 髪乃毛赤く狸々了似り又年立く同一様
 ありけり 狸美生也たり 文政十一年 髪乃毛赤く
 と同一是を狸々了犯させたりと人皆言傳へて

珍しき愛るる後ハ江戸より來れり形里然り赤雅
 小挿翅春々山獺骨あり能續骨解箭用為丸海狗腎
 膳里一枚十金私貨り粵を出せ者斬山獺性最淫丸
 物皆交交一二日了至と休し獺あせハ諸北悉避く
 獺偶あり獺女 西南夷を 采藥致款せしハ獺肉氣即躍
 其身を抱き遂にあせを扼殺せしと云桂海虞衡志了
 山獺土人呼插翅と云以山中婦人乃氣を聞ハ必躍來
 相抱偶をれば則木を抱枯死せしとあり挿翅を狸々
 と誤るるハ

○假面工了日先孫勒夜叉と云承平元年小翁之番
 乃假面を作れりとかや其次を山城任人文云と云長元

曰年小没也其次在大和竹田任小半清光と云鹿苑院将
 軍乃命小依く作也尔假面多しと云永徳二年小没也其
 次を越前大野任赤鶴吉成法名を一透平安城に宗任・龍
 右衛門志重政と云應永十九年小没也其次を越中白氷
 宗忠と云永見郡小後里任くく永見と許由秋せり
 其次ハ永泉乃貝塚く任く越智吉丹と云其次を鎌倉
 小任く徳若忠政と云寛正二年小没也其次を光法
 師と云元を越前平泉寺乃任保小里く後くを獻公
 了任り是出目助左衛門く父小里と云日光よ里と
 光とを十作と云實作と由書里何又越前一乘任福来
 正友曆應口年小没也平安城任増阿弥久次慈照院准

后乃御像作也里文明十一年小没也徳若春若忠政乃
 甥も鎌倉了任也文亀元年く没也大和任人不翁兵衛
 喜祿口年小没也寶来子種も共く東山く暹也以六
 人乃作を六作と称也出目助左衛門も大永七年丁亥子
 生也元永二年九十歳も没也其又代を洞雲康隆と云
 八代を洞白と云西徳又年九月十日没 九代を洞水満喬と云十代を
 洞雲満志と云今も十日又代も由當れり也
 ○延喜主計寮式も岳永泉國百卅二近江國六十美濃國
 廿七播磨國百七十五と見也然るも其形を記き書也
 一西清古鑑も周乃素岳を載く云く岳制衣大腹もく
 飲もく以く樂を節也へく以く酒漿を盛へく尔足乃疏も

缶二

松本新書卷之一

口徑 二寸一分

周 三尺三寸

五分八釐

腹周

二尺

七寸

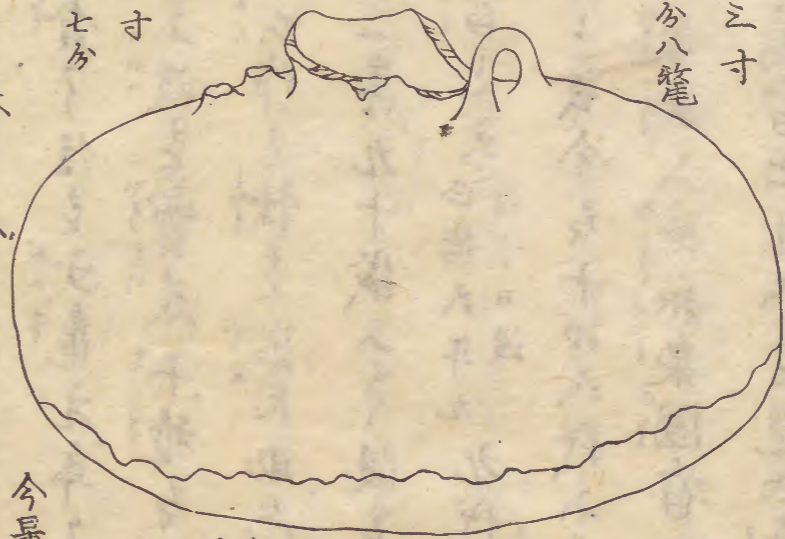
八分

肩周

二尺二寸

七分

蜷川氏藏



信列佐久

郡

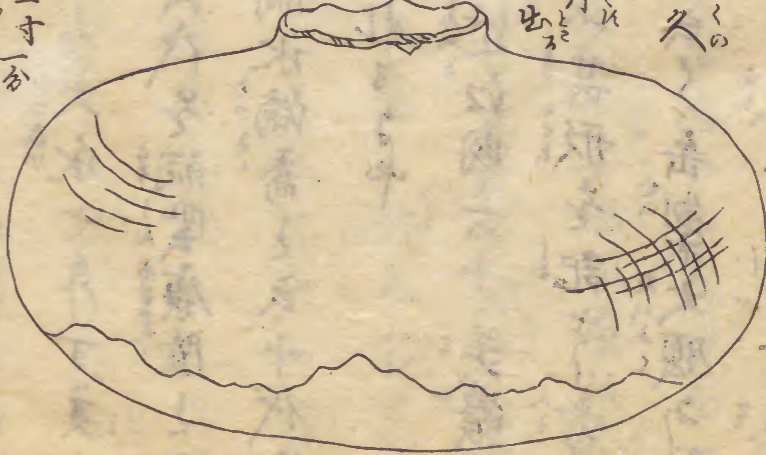
所

乳高一寸一分

兩乳の間

一寸八分

今量七升八合八勺を容



周素缶

西清古鑑所載

通蓋高八寸二分

深六寸五分

口徑二寸八分

腹縱五寸五分

橫九寸六分 重一百廿六兩

兩耳連環



謂是瓦器レ五獻乃尊レ門外缶門內壺是缶
 尊彝乃類レ文小レ尔足レ缶レ二有半出也レを藪レと云
六斗藪二有半出也レを缶と云缶ハ周乃四石ニク今ノ
 六斗ニ升之合ニ尙余也
 缶二出也レを鍾レと云是缶レ亦量レ屬レ亦時レハ缶製固
 專陶人レノ屬レ也レを得レとあり其圖レをレ也レは往歲信
 濃國レ仇レ久郡レノ地レを穿レ獲レ夫レ陶器レ及レ以レ蜷川氏レ乃
 所藏レ乃レ陶器レと瓦レと銅レと乃レ差レ亦レ乃レ全レ同レ一レ也レハ
 即是延喜式レ乃レ缶レ也レ考レ又レ是レ也レ是レ也レ是レ也レ是レ也レ是レ也レ是レ也レ
 是ハ三代レ乃レ遺製レ也レ獨皇朝レ乃レ物レ乃レ子レ非レ亦レ又
 仰レ神聖禮器レを制レ一レ本意レを窺レ入レ了レ是レ也レ云レ以レ

○孟子レ所謂五畝乃宅レ一夫レ乃受レ處レ也レ司馬法レ

六尺を歩レと云司馬法乃六尺を周尺六尺也日本
 曲尺ハ寸五寸五分八釐六毫八

絲レ歩レ百を畝レと云以レと云ハ畝ハ百歩乃地也とハ
 充レ也

日本レ今レ乃レ歩レ百レ直レ也レ又レ十七歩レ余レ當レ一畝レ也レ
 是レ一畝レ實レ也

五畝レ五百歩レ也レ日本レ乃レ歩レ百レ直レ也レ又レ十七歩レ余レ當レ一畝レ也レ
 是レ一畝レ實レ也

八歩レ余レ也レ又レ十歩レ余レを居レ宅レと云一二百二十歩余
 一葉を植レ百株餘をレ得レハ今を以レ推量レハ百株の葉
 小葉レを植レ百株餘をレ得レハ今を以レ推量レハ百株の葉

子レ繭レ二貫レ錢レを得レ難レ也レ繭二貫レ錢レ也レ今量

二斗五升レ許レ子レ當レ二斗五升レ乃レ繭レ也レ上レ絲レ二百

十錢レ中レ下レ絲レ二百レ錢レ許レを得レ也レ一レ女レ工レ乃レ巧レ拙レ土レ地レ乃レ寒

暖レ也レ一レ步レ差レ也レハ

大レ概レと云レ處レ也レ其レ織レ上レ縮レ二足餘レ中レ下レ縮レ二足餘レを

得^り魚^一。夏^の年^々斯^の如^くお^はせ^ば五十^の若^草を^着る^は
 是^れ里^と云^ふ。又^一丈^百畝^を受^と。云^ふ百^畝を^日本^乃步^引
 弓^六千^七百^七十^二步^許。不^當。即^今乃^一町^九段^二
 畝^十二^步。お^里當^今乃^良農^一人^乃力^おろ^九米^母八^八
 石^に斗^余を^得へ^し。但^良農^一人^良婦^一人^時々^乃日^備
 米^二約^租税^を納^め。餘^計。不^許。お^ろ九^米母^八
 食^一。一^石八^斗と^定め^九人^分十^六石^二斗^殘。里^十三^三
 石^八斗^{あり}。相^歳半^年分^乃食^八石^一斗^を蓄^へ其^餘又^又
 石^七斗^を賣^く。鹽^不交^易。去^川へ^し。蓋^子乃^所謂^上農^丈
 之^九人^を養^入と^云。由^丈紙^是等^乃割^と見^合さ^く考^へ
 之^形。然^也。地^力を^竭せ^し。經^済乃^始と^云。魚^一。或^云

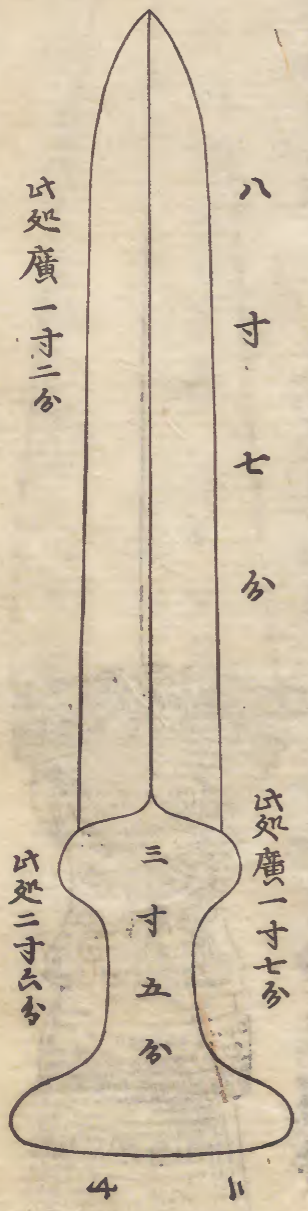
○野^の村^左衛^門と^云。近^江侍^{あり}。加^後肥^後守^清正^仕。く^く
 禄^二百^石を^受。熊^本お^佐。其^屋鋪^九百^坪。石^と割^と
 せ^し。お^ろ九^米母^八を^五十^坪計^し。お^ろ九^米母^八又^十坪^の外^を
 三^百坪^の圃^とお^ろ九^米母^八又^十坪^ハ。栗^梅茶^をと^を植^せ。さ^く
 屋^鋪乃^總圍^ハ。皂^莢と^柳を^栽たり。皂^莢ハ^生枝^を並^し。燒^く
 ぬ^る。然^るもの^形。色^ハ形^り。か^ハ若^芽を^採く。茶^とお^ろ九^米母^八
 魚^一。柳^まく^薪と^おろ^九米^母八^と。十^年計^乃内^ハ。皂^莢五^十株^と
 柳^五十^本。栗^廿株^梅百^株。茶^五十^株。繁^茂し^け。色^ハ。皂^莢ハ^夾
 子を^采て。衣^服乃^垢を^去。餘^をる^を賣^く。用^物お^換へ^し。
 茶^ハ我家^年分^り用^く。餘^をる^を親^戚に^贈。賈^をあ^まれ^る
 を^賣へ^し。梅^實年^々。又^六石^を收^め。と^云。され^ハ三

百石の禄ふく馬二疋侍四人下部五人を養ひ武具馬具多鐵炮乃用意他乃千石より手厚うりしと云加藤乃家絶一時野々村に江戸へ来り或家了仕く野村と改む其子孫某肥後へ使ひ先祖乃舊宅を向ふ今於柳と鬼策とい昔乃まふ現存せと云

○江勿滋賀郡松本と云知ふ松本民部少輔乃舊居あり五段許乃地ふ之方土手乃形残多く其上小箭竹を栽たり松本に吉田工野介重賢の末子あり射藝を好む故るあまを伐たふ洲あま磨き自されを刻て用ひしと形りさきい松本に細工乃書とく相傳き一人あり箭ありと乃之をくりく記したりと日夏繁高の隨筆ふと云これ

ハ。松本を通り一處に土人より同ふ知るもの形し享保二日夏見し時よりまふ百年ふ餘也ハ。箭竹由伐盡し跡なくあまはふや

○讚岐國香東郡高松乃海中より出ると云。劍を見しハ。乃長さ八寸七分。櫛の長さ三寸五分。まふ寸二寸二分あり。西清古鑑に載し周乃七首と精粗乃差ありと云。形大倭相似くせり。あまは七首と云へる形り



ハ 延廣一寸二分
重六十八分あり

西清古鑑周匕首 身長五寸三分 闊一寸八分 重七兩



按七首似劍而身短劉向說苑尺八短劍頭似匕故稱匕首
 高松海中より出づけ劍今尺あり二尺二寸二分あり是れ
 七尺八寸あり是れ其尺今乃六寸七分七釐許あり
 明鄭世子朱載堉乃後乃裁衣尺の九寸六分を量地尺
 とし日本曲尺の一尺 量地尺を八折し五をかくれは周
 尺ありと云りかあへは 一尺七分五釐二を八折れ八寸二分
 五分釐五 六釐あり是れ五をのけしは八寸八
 とある

○或家藏ふ朝鮮板乃證類本草ありその標紙裏ふ及故を
 用ひたり讀くこれ朝鮮乃戶籍あり尤了編寫と

拾柒丙辰本求禮 父學生春祖展力副尉夫曾祖學生 妻
 元明外祖學生李永生 本慶州
 母富徳年伍拾柒丙戌戸正兵展力副尉李叔泉年肆
 年貳拾捌乙卯本泗川 父修義副尉順京祖學生得守曾
 令同正貴外祖學生金京山本金海
 妻南原安未付館婢欣徳年伍拾陸丁酉 父私奴無作且母 戸正
 同館婢欣非
 郡守堅義外祖奮順副 妻仍邑徳年參拾貳辛亥本 咸
 尉許冲敬本金海
 年貳拾柒丙辰戸津生金允石年肆合庚丙申一本

伍拾柒丙戌の丙戌の生みく今年五十七といふと
 け戸籍壬午の歳と知る乙卯の歳より廿八年め壬午
 辛亥の歳より廿二年め壬午 萬曆十

年壬午みくもあまゝ。日本乃書撰ハ。壬午五十七と書例
あり。されに五十七乃字なり。書損あまの。檢察る據あり。朝
鮮乃書法みくも五十七丙戌とある故。五十七のたし書
損あまの。丙戌みくも訂し。丙戌みくも換せし。六十七みくも訂
し。聊乃とあり。たしあまの書法形なり。本求禮の本。泗川
乃とあり。本國と知る。父祖父。外祖すく書付。実み。丁字
あり。潤方あり。

○彦根乃先侯へ。御加増賜をり。一時兵服を掌る侍長乃
中けあり。前くの御分限。少少みくも。扶持し。侍長兵士
多く。ゆり。みくも。自給兵服の廉品を用ひ。勢多ひき。今を
大國乃主り。あまの勢多ひぬ。服の身の表と。下てゆへ。精兵

を用ひ。勢多入。履き。と。勿論。みくも。織を等へ。は。みくも。液
ゆり。と。ヤ。せ。い。若。侯。勢。多。色。か。たり。大。息。を。ゆ。り。せ。ら。也。儀。也。
さ。く。も。其。方。共。の。た。の。も。き。若。と。今。を。い。思。居。み。危。き。ん
持。く。ふ。の。よ。か。今。御。加。増。賜。を。り。く。大。國。乃。主。り。か。と。勢
多。入。の。某。り。精。服。衣。の。上。意。り。あ。ま。の。精。兵。多。く。養。ふ
て。國。の。鑄。り。か。れ。な。き。ん。乃。あ。ま。の。急。か。れ。の。衣。服。お。ん。と。い
い。あ。ま。の。廉。品。を。用。ひ。よ。と。云。へ。き。其。方。と。た。の。も。に。精。品。を
衣。と。い。何。と。と。や。世。ハ。ま。ふ。あり。み。く。も。子。や。と。宣。ひ。く。誓
涙。を。か。り。み。ひ。け。る。と。わ。り。あ。ま。の。を。聞。く。膳。部。を。掌。る
侍。長。の。獻。立。を。書。く。懷。中。し。く。出。る。り。い。の。序。あ。ま。の。思
て。引。返。し。御。膳。ハ。今。を。乃。通。り。仕。す。り。る。へ。き。り。と。中。き。り。か。ハ。

前車乃覆る後車乃戒と宣ひしと云

○山城國葛野郡嵯峨往生院乃舊記と云院主乃尼々取

出しく見きふ中元禄十八年近江國野洲郡永原村

北村中北村住持利貞始く云余の右の南寺開山妓王

妓女出生所ふる故たり妓王の惠那九郎時長女たり

妓王法尼性生建久元年七月十六日と云中北村ふ妓王堂

あり是の村水不自由な妓王平相國云へ移る堰を

築き一功不依く云とあり尼乃書たふその形色の志と

けかくしゆる如くありと妓王乃没日かとい傳ふる云

ありふるへ盛衰記より是の妓王妓女乃遁世の治

承四年ふる妓王廿一妓女十九閉口十七佛十七とあり

然る時建久元年の妓王廿一歳あり妓女廿九閉口十

七佛廿七ふるへ利貞尼の往生院中興の夢利貞

比丘尼寶永元年二月九日閉口十八歳あり遷化と云

帳を見抱さく往生院了閉妓王妓女佛乃木像あり

審定さる小東海道大磯鴨立沢乃虎の像と一手り

出くふ物ふるへ古物ふるあり

○鎌倉右大将頼朝卿久安三年丁卯歳十月誕生燈籠火

姓あり御臺所政子保元二年丁丑歳誕生池水姓あり

男火女水火ふりあり子ありたといありと短命なり

へ頼家女三實朝女衣食共く之も也常小口舌一と

ありと世相り見えたるいふゆりや否考へ但見利尊



暖峨ぬか往ゆ生院せいん安置あんち四比五尼像しひごにぞう



氏郷嘉元二年乙巳歲誕生。燈籠火姓。少く。御臺所未
 搦相模守盛時女。徳治元年丙午歲誕生。天何水姓。少
 男。火女水。頼朝卿と。全く同く。草創の武將不在。以
 中。奇と云。魚但世相迷入人。多ク也。と云
 ○大寶雜令。金目方一兩。銀目方二兩。銅目方九兩。
 鐵目方廿七兩。と。交易を魚今の効意を今
 より。千百四十二年前乃こあり。然此目方一兩と云は。
 今乃目方拾壹分。八釐。及是。及之。兩ハ之拾三。及
 七分。及釐。及毫。及分。但此金ハ。灰吹あり。や。沙金あり。や。
 未詳。比令より。八年過く。和銅元年七月。銀銖。銅銖。を
 鑄。三。ら。せ。つ。と。續日本紀。不見之。同二年三月。銀銖。銅銖。

鐵通用乃法。を。定。め。ら。せ。た。る。ふ。銅銖。口。文。了。當。る。物。ハ。
 銀銖。一。文。を。用。ひ。よ。と。形。り。依。く。銅銖。和。同。開。珍。乃。善。品。
 を。も。の。り。見。る。ふ。一。枚。目。方。壹。分。今。ハ。六。二。八。了。南。原。
 銀銖。和。同。開。珍。一。枚。目。方。壹。分。七。釐。八。毫。あり。比。
 銅銖。四。枚。乃。目。方。九。分。六。釐。及。毫。あり。是。を。云。
 小。除。り。即。銀銖。一。枚。乃。目。方。壹。分。七。釐。八。毫。形。り。
 然。る。時。ハ。和。銅。の。銅銖。銀銖。通用。法。也。大。寶。時。と。同。く。
 割。合。と。知。へ。し。次。小。何。乃。依。り。銅銖。一。枚。壹。分。八。釐。
 六。二。八。銀銖。一。枚。壹。分。七。釐。八。毫。と。鑄。三。一。や。と。云。
 之。を。考。へ。る。ふ。銀銖。兩。ハ。今。乃。十。壹。分。八。釐。及。毫。あり。比。
 是。と。交。易。せ。し。へ。銅。ハ。三。拾。三。分。七。釐。及。毫。あり。比。云。

拾之每七分五釐乃銅を廿日枚入鑄三之ハ壹枚は五
 日分。六二又とある。銀十一分五釐を六枚入鑄
 三之ハ壹枚ハ五釐八分七釐入毛とある形。是ハ依
 見れハ。日文鈔乃紙ハ和銅銀錢ありと知へし
 ○木曾乃贄川驛ハ宿里ノ時亭主某ハ家ヲ古ク持傳
 えくふ文ヲ讀解やく節々明らめよと云ひ。取
 出をを。三之ハ天文永祿乃頃ノ消息あり。乃之賞
 主ハ書ハあり。慶長二年乃端書あり帳ハ
 御糶石トリ過ふハ枚合入の中ハ枚乃物先ハ
 歩去入ハ分ハ志リト申合ふ中ハと書たるあり。世
 世ハ珍しく心三之ハ影抄了せとやと。筆紙を取出る

ハ亭主止くふ。それハ此宿ハからし。播井・敷原・遠ハ
 舊ハ驛舎乃客帳乃端書あり。影抄あり。真乃物を
 系りし。夜明ハ此帳綴直くとある。廿三ハ
 筆を収めし。翌朝出立し。志三之ハ歸るさハ必
 とハ構きハ障あり。贄川ハ宿ハ。まをくハ驛ハ
 六日往來あり。遂ハ得とあり。慶長乃頃ハ
 旅人。糶二合五勺を一日ノ元。十日路を約。二升五合
 七齋を。驛舎ハ着く。湯を日。糶を喰く。寝るを
 且。それハ湯乃本ノ代。日錢五錢を拂ハ往來し。と
 然るを旅人。自ハ湯ハ。糶乃かさを殖
 舎。打任。頼め。ハと。道。糶乃かさを殖

志願ハ捕を掠むるもの有らば。帳乃ち其の書付
致さるるありしと形り。是ハ依々思ハル軍防令也。兵士
人々も。捕六斗を儲たり。由伊勢物語乃ハ橋下。捕
食々於源氏物語玉葛乃長谷ふ。豊後介。御臺か
と。打合さるとむつろし。捕あふふ。論ふ。道明
寺あり。割表と由。根本旅行乃用意あふへし。

○近江國坂田郡鳥居本驛。雨。阻ら。日一日。居々。致
亭。主。家。子。傳。ま。せ。る。書。と。く。見。ま。
天正十二酉七月十三日。秀吉。関白。成。乃。御。内。御。祝。

- 親王 若宮 龍山 九条殿 一条殿 二条殿

近衛大御所

王 伏見殿 宮人

花山院 久我殿
文政御門 西園寺

院前侍秀吉御事
関白 菊亭殿 徳大寺

初獻 乃 かし彩 そま物 所 盃 御 かしけ

二献 ちむ 以ちん 所 七の物 まハ

三献 ちり ころ 所 七の物 難

四献 ちまら けつ物 所 雜者

五獻

むしむぎ

御多入物

六獻

あひむい

うけい

七獻

たこむぎ

くーら

御本膳

志不引

やきぎ

山椒

番の物

ふくじ

お汁

二

うすむぎ

すー

あつめ汁

三

やき物

金のさそ

白鳥汁

御菓子 九色

うまかい

揚皮

豆あめ

お栗

色も

おろ

以上 修り花いろあり

紙乃換墨色當時寫きしをたふふへく豊長太閤は壯觀
を喜ひ給ひ羨慕を好ませしと云くふ此料理書を見
せば飲食る心を周へらせりけるみや

○豊長太閤伏見乃城おや角けり頃廣間お出りせ
五腰乃刀を見り試み主乃衣をいりゆるり

せりしはたるけりけし。新田玄以いりし。新食けか
 子や。徹子神智ふりし。をよみ。し。と。驚。驚。たり。た。れ。の
 太閤笑。行乃子細。ゆ。あ。い。て。形。り。全。形。あ。く。実。筋。か
 る。秀。家。あ。ふ。へ。寸。乃。延。た。ふ。景。勝。よ。革。巻。あ。く
 質。素。あ。る。利。家。乃。刀。あ。り。異。換。乃。物。敷。あ。せ。い。ま。れ
 輝。元。あ。ふ。へ。大。小。長。短。乃。格。好。う。庄。敷。乃。相。應。を
 去。い。武。義。亞。相。不。極。ま。せ。り。と。い。わ。れ。と。か。中。常。公。紀
 徳。不。見。え。り。実。あ。そ。乃。人。々。の。氣。象。を。あ。ら。わ。る。り。し
 た。是。里。か。以。全。作。あ。く。美。祿。を。好。ま。せ。し。秀。家。の。終。ふ
 家。國。を。表。ふ。し。子。孫。も。あ。は。れ。絶。た。り。む。頼。義。朝。臣
 馬。物。具。乃。さ。い。る。あ。ふ。は。亡。國。乃。兆。あり。と。士。一。成

戒め玉ひし。とを思ふ。魚。伊勢宗五乃書。た。ふ。大。冊
 子。の。云。方。板。家。都。都。軍。此。所。腰。乃。物。の。鞆。ぬ。り。お。と。し。
 櫛。皮。出。し。も。と。金。あ。い。り。柄。の。ら。同。系。を。黒。く。塗
 れ。り。又。櫛。に。金。も。り。同。系。所。目。貫。丸。乃。四。了。流。ふ。柄
 扇。を。い。け。所。算。赤。綱。之。鏡。付。と。あ。る。か。と。考。合。さ。れ
 い。金。無。垢。乃。小。道。具。の。用。也。り。き。あ。り
 ○寛永三年六月。所。上。洛。乃。時。路。次。中。宿。賃。所。定。書。と。て
 令。條。記。了。見。え。り。

一人の口文 一馬の口文

但。自。台。新。境。の。も。り。口。文。馬。の。口。文。馬。屋。の。口。文。自
 台。薪。た。き。の。り。口。文。馬。屋。の。口。文。共。亭。主。の。薪。の。り

旧文たる

一京ふくひ。馬屋等々。之とて繋ぎ。自らの薪也。旧文

乃事 以上 寅又月

今考ふ。寛永錢。旧文。金一兩千分一あり。金一兩。旧

物也。今乃錢。六文。又分。當ると云へけ。也。と。慶長

金。今乃金。同方。同く。寸。通用。乃。賈。詳。か

ら。ね。と。引替。賜。り。割。り。知。る。大抵。一倍。了

當。也。旧文。と。云。を。今乃。六文。分。直。し。以。を。信

志。く。十。之。文。と。知。へ。八。文。と。廿。六。文。と。知。へ。一

○活字。扱。了。逸史。と。云。書。あり。大坂。乃。中井。積善。乃。著述

あり。讀。く。見。り。了。校讐。乃。と。い。ぬ。條。々。多。し。ま。つ。渡。君。の

年。を。旧。十。と。注。せ。り。是。誰。也。知。た。る。淺井。長政。乃。息女

か。里。長政。戦死。乃。天正。元年。生。也。と。い。は。し。に。十。之。歳

ふ。あり。と。い。入。屋。了。引。り。乃。時。之。歳。乃。姫。君。と。い。は。し。を。や

又。里。見。安房。守。忠義。乃。祖父。義高。公。族。と。云。を。以。て。權

を。專。し。士。乃。ん。を。得。其。至。を。廢。し。て。國。を。奪。ふ。と。云。

義高。の。忠義。の。祖父。ふ。あり。曾。祖父。か。里。安房。國。を

取。た。か。り。義高。乃。祖父。義高。乃。時。か。里。又。天文。十二年

乃。桑。小。西洋。杜。瓦。爾。國。商。船。大。隅。海。上。種。島。小。治。り。了

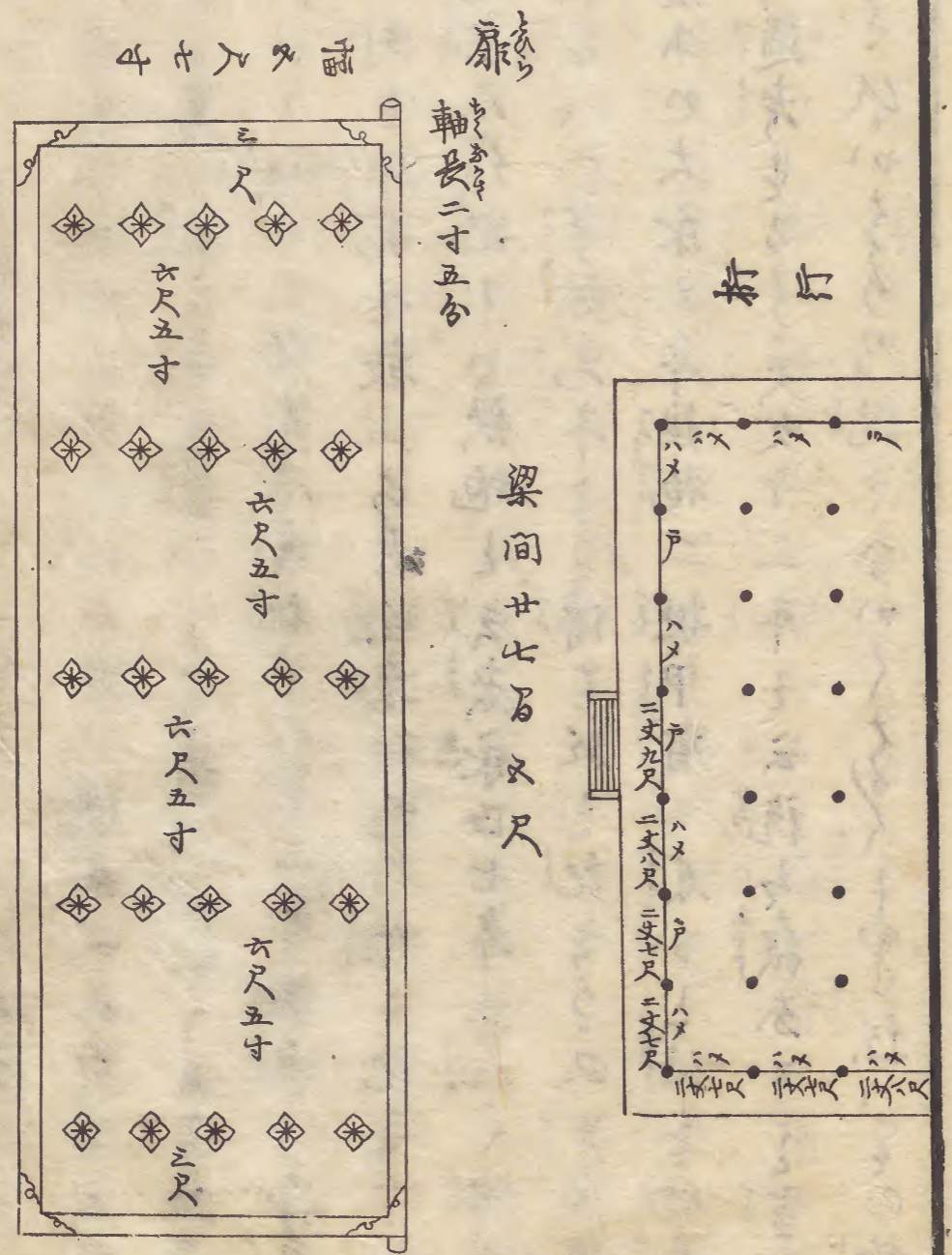
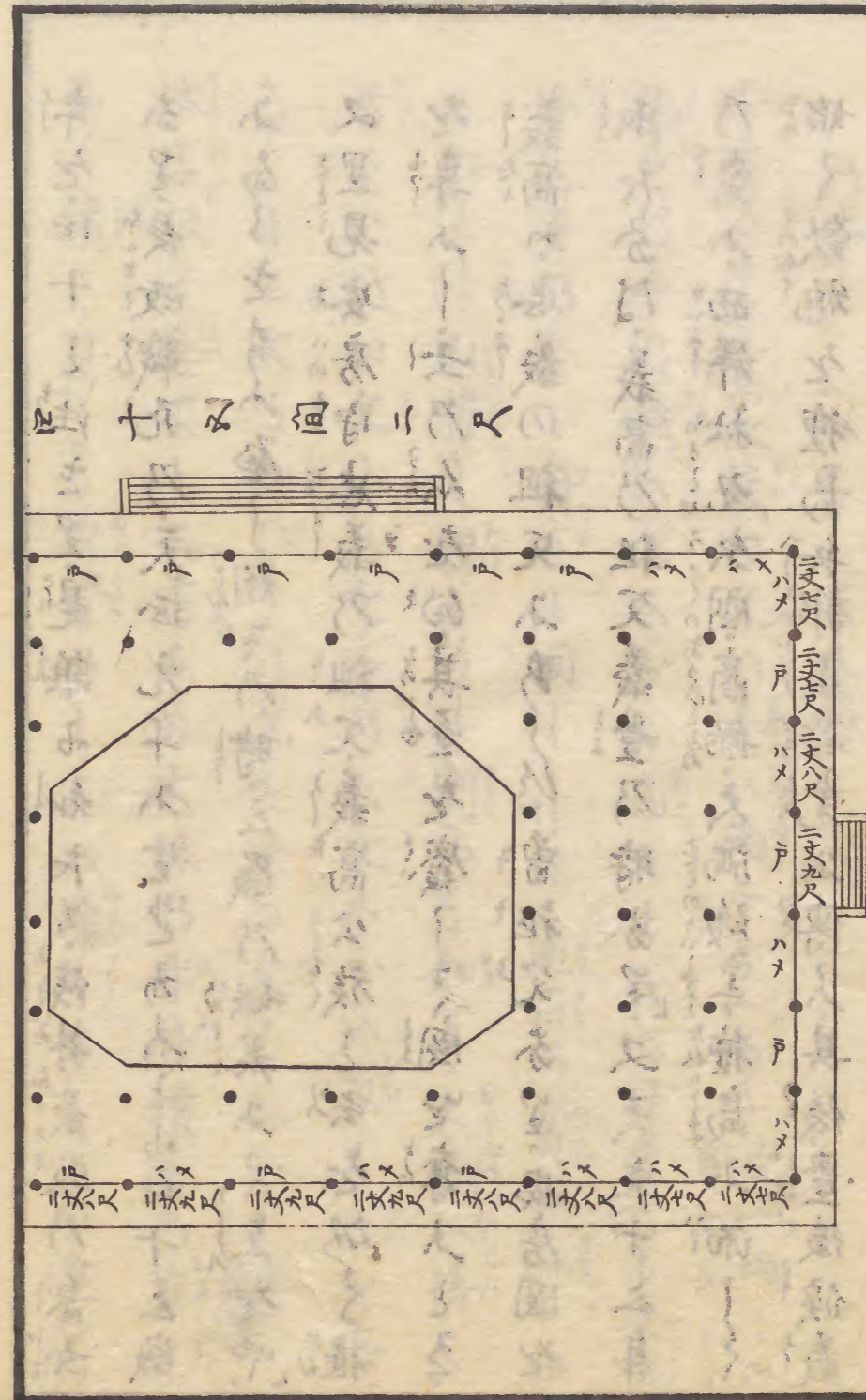
始。て。鉄。炮。を。種。島。兵。部。丞。時。亮。に。傳。ふ。其。後。豊。後。候。義

鑑。也。を。廣。め。伊。豫。河。野。氏。其。精。妙。を。抱。む。と。云。里。南

浦。文集。に。依。り。考。入。た。り。天文。十二年。癸。卯。八。月。廿。八

大佛殿指圖

今村土佐掾所藏



總長三丈二尺

四葉大サ六寸 一段五寸

日年良叔舎喜利志多侘孟太乃二人舩を種子島小
 舟たりし鉄炮を持渡り時堯了傳之時堯了傳之
 を根来乃松坊子傳之後小畧乃橋屋又三郎と云之
 種子島了来く是を學ひしう。畿内關西ももく此器
 あふを承く時堯乃松下又郎三郎漂流し伊豆
 小列里ヶ器を教ふ古也關東鉄炮乃始と記さる。又
 北条又代記する鉄炮と云之永正七年小初く渡り
 關東へ。享祿元年より傳ち於と記さる。又甲陽軍
 鑑小ハ大永五年鉄炮二挺甲府へ来ると記さる。彼是
 を通考する。天文十三年と云統之誤あると言は
 らる。かきり乃説さへかくる。しゆ孫ハその餘

乃事實ハ講究乃至當あるぬゆふあへ。

○洛東乃大佛ハ釋迦牟尼佛あると論を待む。然るを
 南禅文英叟清幹長老乃書を依鐘銘ハ天正十六戊
 子夏之孟相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舎那
 大像矣と見也。翻譯名義集ハ盧舎那此ハ光明徧
 照と云釋迦牟尼此ハ能仁寂默と云之。終ハ盧
 舎那と釋迦牟尼ハ各別あふを清幹長老一體と
 思ふ也。法あるハふりし。形里或ハ毘盧遮那ハ
 法身盧舎那ハ報身釋迦牟尼ハ應身と表し之身
 一體とあると云説ハ依りいゆる小や。然也と由之
 小分孫ハあるぬ故了之小分つ也。盧舎那と釋迦と

一ありといふ云々一依代大佛豊后太閤乃作らるる
 塑像あり南都法二宗貞法印を前く弟宗印法眼ありと
 かやたると慶長元年閏七月十二日地震あり崩壊たり
 去る其跡へ信行善光寺乃如来を迎えたり一二年二
 年八月十八日如来依代へ歸るあり後木像をかき
 せし同二年八月十八日太閤薨御。廿二日大佛敷供養
 と云い右閤の銅鑄了意あり一と云い同七年改
 て銅像をかきけり。十二月四日鑄了乃失火に依り大
 佛敷焼失したる。十八年六月小至る銅像をめて
 成就せり。此銅像寛文二年三月廿二日乃大地震了。
 破損せしより御首をの取せり。佛體乃中へ七寸

削平本由立々傾きを修理しける。六月朔日あり大地震
 震たり出り此像の佛體もか破壊せしより。新木
 像を化らる。舊き像を。同八年より天和三年まで十
 六年乃間。江戸亀井戸あり鑄了鑄らる。この鑄
 今現存する文錢あり。然るに在左兵衛大尉狗高庸の
 書あり。寛永錢譜に松平信綱乃建議ありと云と。信
 綱ぬ。八日前。寛文二年三月十六日。率去あり。大
 地震あり。八日前。前。或は信綱主乃議り。依り
 去るを鑄ち。一あり。偶然。地震あり。地。震。り。由。里。つ。ふ。き。ら
 京都富小路二条下る慶願寺あり
 大佛敷出来入目覚
 一合子に万二千三百八拾枚
 一銀貳万二千七拾四貫目
 以米高百と拾四万七千六百六十石
 以米高百と拾八万二千六百四十石

一 米貳拾二万七百石

之ノ合 米高貳百九十六万八千六百石貳斗

慶長十八年

增田右衛門尉

二月六日

板倉伊賀守致

算用仕三ノ者也

と云書付あり。金を放ふ之十一石七斗八升七合六勺餘り
當家米相場あり。銀を貫目より六十石八合六勺餘りの相
場あり。金を一枚銀五百廿九匁七分を鬻余乃相場と
一。次り貳百九十六万八千六百石貳斗を金に替
へ。九万之千八百八十枚餘り當家今時乃小判

て二百三十三万四千六百廿八兩許 金一枚廿八兩

易へ。米の今小判一枚一石貳斗七升を合五勺

乃法量 今錢百文一 一か也の工匠乃利多うりしと思

ふ。今ふく巾金一兩價をへし知へ一石

○三井越後守源高安が越後守高次乃男あく伊勢國

安濃郡一色村に住し。後ふ富田信濃守子属し慶長三

年八月廿二日津あく渡し西來寺ふ葬并里之明宗觀

と云高安の男子四人あり。長子之郎助高時次男次

郎兵衛某之男傳某に男則兵衛高俊あり高俊乃

長男之郎左衛門後貞京より出く賈ふ服し之衆室町

子住ま。四男八郎兵衛高利も亦同く京より新

町六角小住生。高利小男子十三人女子五人あり長
男八郎兵衛高平。此子孫を北乃次男八郎右衛門
高富。幼名を長小郎後小次郎右衛門と改め。又八郎
兵衛と云。此子孫を六角三男を三郎吉高治と云後
三郎兵衛三郎助八郎右衛門と改む。此子孫を新町
四男を万と助高伴と云。後小次郎四郎八郎右衛門
元右衛門。次郎右衛門。九右衛門と称す。此子孫を竹
と五男五郎八安長。初系。松屋五郎右衛門。養子。住
徳乃石川尚舎君と交娶。里一か。石乃六男を元
一字を貫以我井字小合せ石井と称す。乃六男を元
右衛門高好と云。此子孫を出水七男八男ハ早世
九男八郎次郎高久と云。十男宗八高春。十一男元八

高勝。兄八郎右衛門。十二男庄次郎高久。後小勘右衛
門。八郎次郎薙髪。一々宗悦と云。此子孫を南十三男ハ
半兵衛孝賢。實ハ櫻井氏松坂了住。と云。松坂小野田
後貞之男吉郎右衛門高古を養。石井安長。り女小
合と。松坂了居。と云。高利十三女を松坂乃長勝。其
小嫁き。其游蕩と云。離縁。しつと。由男女の子あり
け。産を分ち。室町了居。しめ。實父と母と。乃氏
を合き。長井と称す。高利子男女十八人。孫に十六
人。曾孫に十八人。玄孫六十人。及小繁昌と云へ。
高利元禄七年七十三歳。没。と云。ハ貞享乃江
戸圖鑑。綱目。了越後。や八郎右衛門と云。ハ高利ある

新古今集卷之六十一

一と明らけく世産を治む術を妙を得しあふ
 小田原乃北条氏了仕たより遠山神二郎景氏と云い
 人為武義國久良岐郡谷利谷と云地乃領主たり地
 理を盡以術を妙を得しりといふ其一二を聞けり或
 者景氏小地令澤乃入海を埋む田をかさは若干乃
 利あふへ今姑く境目乃無事あふ時不當り此企
 をあさは萬世其賜を受へいと勧めりし景氏志
 然然して物いといやあつてけ入海乃体を見らふ人
 乃穿たふし有へう寸天地乃自然に掘くあふへ
 々也の爰を埋たて田をかさは天地より他け入
 海を穿つへ一尤あつて我領知り利あつと必外

小損あふとして聞入りしとあり又或云鶴見
 乃原の四方六里及ふ入る鎌倉將軍家乃時より
 新田を取立たりと企つる人ありあつと云其
 成りてくらしき其の思慮乃精々ぬあふ今
 を想起しあふは末代より乃益あふんと持てのし
 け也の暫時物を案じふさほありし筆をとるに
 方六里の徑一里半あり此田歩凡一千〇二十九万
 七千六百歩あはは町段法ふ二子九百十六町
 路敷畔畝かと引去く由二子町許乃田畑あふ
 農夫に子人許り佃處あり田畝の少く作人多
 ハ利あひく人少く田畝多ハ損ふり新田を思

立地んより古田乃荒^{あき}やらん^らにあき願^{ねが}り^ん色と云

たりのし^こ形^{かた}の^り

深^こく^ちの^り ^{あき} ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

あき ^ら ^{あき} ^{ねが} ^り ^ん ^色 ^と ^云

柳菴雜筆卷之一終

